

## ＜研究事例＞

### 心ゆくまで遊ぶ子どもを求めて

増 田 とし美  
片 山 真 澄  
水 野 美 恵

#### １．テーマが生まれるまで

昨年度は、園目標①やさしい心の子ども②進んでやりぬける子ども③元気な子どもに近づくために、子どもと保育者のふれあいを大切に保育してきた。そこで、絵本を媒介とする「対話」を展開し、子どもの世界を探り、広めることと、絵本の読みきかせを通して、絵本から抱いたイメージをふくらませ、遊びを創造していく子どもの、より豊かなイメージ作りの手助けをすることの、二つの実践に取り組んだ。そしてこの実践を積み重ねる中で、子どもは、遊びの中でこそ本来の姿を発揮して豊かに育っていくのではないかという考察を得た。

そこで、本年度は、「ひとりひとりが心ゆくまで遊ぶことのできる保育」に迫るために、子どもたちと自然、絵本とのかかわり、友だちや保育者との交わりをより深めていこうと考えた。

#### ２．テーマに迫るために

心ゆくまで遊ぶことのできる保育をしていくために、まず「学級経営のねがい」を持った。そしてその実現のために、

①子どもたちが今、力いっぱい楽しんでいる遊びはどう生まれ、ひろがっていくのか。また子どもたちが何に向かって動きだそうとしているのかを見つめること。

②その遊びに保育者も、子どもと共に体を動かしひたり、夢中で保育を行なうこと。

この二点に心がけ、子どもが動き出そうとする心とときを大切にして保育してきた。

### 3. 研究とともに

現在、研究の途中であるが、次のことをお互いに学ぶことができた。

○保育者自身が小さいつぶやきを聞きとること。言葉にならない心の言葉をよみとる大切さ。

○子どもたちの中に教え合う姿、友だちのすばらしい発見、発想を認めようとする姿を大切に見守ること。

○ひとりで遊んでいると思いこんでいる子どもも、物とかかわり遊びこんでいるうちに、友だちとかかわりができているのではないか。

○友だちとのかかわりの中で、自分の気持ち、考えを少しずつ出せるようになったことから、一緒に遊ぶ楽しさに気づき始めている。

子どもたちは、自分のまわりの自然や遊具、絵本とのかかわりや、友だちとの交わりの中で、その子なりの考えや気持ちをぶつけ、衝突したり、泣いたり、怒ったりしながら遊びこんでいる。そうした遊びの中で、自分を見つめ、友だちの気持ちがわかり合えるようになってきているのではないか。

次に、その事例をいくつか述べてみたい。

#### 〈事例1〉 5歳児 まつ組 担任：水野美恵

自然や友だちとのかかわりの中で育つC君を追って

##### ①学級経営のねがい

ひとりひとりが、「～したい」「～してみたい」という願いを持って、感動や発見を仲間に伝え合いながら、想像の世界を広げ、さまざまな遊びを生み出してほしい。そしてその中で仲間と協力する楽しさを知ってほしい。

##### ②友だちとのびのびと遊んでほしいC君

Cは、太郎の後について行動し、主体的に何かにとりくんだり、本気で熱中する姿勢が見られなかった。戸外で身体を動かすことを嫌い、担任が話しかけても聞こえないふりをしてしまうことが多い。そんなCに、

①友だちとかかわる中で、自分を見つめ、友だちの気持ちをわかり、助け合ってできるようにしてほしい。②「～したい」「～やろう」と、自分の願いを持たせ、それを実現するために励まし、やり通した満足感を持たせたい。③自然とかかわり、自分の目で見、触れることを通して心豊かに、感動する心を育てたい——。という願いを持った。

### ③裏山で遊びながら——

幼稚園の裏山は、子どもたちの格好の遊び場である。探検に行こうという話が持ち上がり、Cは、ゾイドの話題から交わるようになった活発な次郎の後について山に登る。探検から、地図作り、宝探し、と遊びは広がり、製作の好きなCは、それらの活動から、裏山の自然の中に引き込まれていく。そんなある日、Cはモグラの穴を発見する。どこまで続くか掘っていく間に、次第に友だちと交わるようになる。やがて子どもたちは、裏山に基地を作る計画を立てる。Cも太郎や次郎とグループを組み、ダンボールを使って、ベッド作りに励んだ、が、ついにはダンボールの中に入って転がる——たけし城ゲームを考案した。それはクラス中の大人気となり、自信満々に大声を上げるCだった。

### ④虫とりに行こう——

夏の裏山は、昆虫でいっぱいになった。カナブンやカミキリをとるCたち。Cは、虫の知識が豊富で、友だちや担任に親しみを持って話しかけるようになった。

### ⑤わりばしで遊ぼう——

わりばし鉄砲が流行し、次々に新型を作り出すCは、皆から頼りにされていく。それがクラス中に広まると、的あてや、どこまでとぶか競争になった。日一日と、遊びにのめり込んでいくCだった。

### ⑥Cに育ちつつあるもの——

- ①友だちと一緒に身体を動かして遊ぶことも楽しめるようになってきた。
- ②自分の好きな遊びを通して、友だちや担任とのふれあいが深まってきた。
- ③家に帰っても生き生きと遊んでいる。

### ⑦今、まつ2組では——

- ①基地づくりから、自然をいろいろな角度から見つめ、素材と中にひそむ価値を子ど

もなりにとらえ、新しいものを作っていく力が養われた。また、ひとりひとりがイメージや意見を伝え合い、仲間と一緒に作り上げていく姿が見られた。

②一緒に基地を作った仲間と、運動遊びに熱中したり、男の子が女の子に、わりばし鉄砲の作り方を教えたり…というように、仲間を通しての育ちが見られた。

③虫を通して、自然や友だちとかかわり、新しい発見をし、感動を伝え合う楽しさが味わえた。虫や友だちへの思いやりも見られた。

④わりばし鉄砲は、沢山の型がある。日に日に新しい型を考案しながら遊び込んでいく。

○子どもは、心ゆくまで遊ぶことによって、自分の可能性をフルに発揮することができる。たくましい創造力、探求心、自然や人を思いやる心…それらが自然のうちに養われていくのではないだろうか。保育者は、子どもが心ゆくまで遊ぶことができるように、よりよい環境を共に作り上げねばならない。

## 事例2 4歳児 ばら組 担任：片山真澄

なかまになろうよ！ ―友だちとかかわりをもってほしいBくんをみつめて―

### ①学級経営のねがい

友だち同士のぶつかり合いの中で、ひとりひとりが自分の感じたことや意志を相手に話せるようになり、その中で相手の気持ちを思いやる心を育てていってほしい。

### ②ひとりあそびの多いBくん

今年入園したBくんは、特に目立った行動もなく、どちらかといえば目立たない存在であった。いつも肩の力がぬけないようで、表情が暗く、言葉の数が少なかった。なぜ、こんな状態なのか考えられることは、①保育者との間の安心感・信頼感がまだ薄い、②友だちと遊ぶことの経験不足、③遊びの楽しさを知らない、ということであった。しかし、積木遊びやカニを見ている時は、自然に生き生きとした表情になっていた。そこで、Bくんへ二つのねがいをもった。①友だちと遊ぶ中で、友だちとかかわりを広げて、色々な遊びを経験して遊ぶ楽しさがわかってほしい。②小さな動物や自然物とかかわることを通して、やさしい心・感動する心を育てたい。

### ③Bくんを見つめて ―様々な経験を通して―

#### ㊦うさぎさん、うさぎさん

友達や担任の前では、みけんにシワをよせ力んだり、ぼんやりして生気が感じられないBくんであったが、うさぎ小屋へうさぎを見に行くと、自然に会話ができ、やわらかい表情で力むことなく、思っていることが言えるBくんであった。

#### ㊧外であそぼうよ ー砂山づくりー

砂場はBくんにとって安心して遊べる場所のようで、ひとりで砂場のすみで砂山を作っていることが多かった。そこで、全員が熱中して遊ぶ砂場あそびをとりあげて、グループ対抗の砂山づくり競争をやってみた。友達と一緒に遊ぶ経験が少ないBくんにとって、皆と同じ目的を持って遊ぶことは抵抗があったようで、この時間は、一人で遊んでいるだけだった。

#### ㊨積木あそびの中で

積木あそびを通して、Bくんの中に友達を意識する気持ちが芽ばえ始めた。友達を誘ったり、呼びかけにはっきりこたえられるようになり、自分の言いたいことを言えるようになってきた。

#### ㊩Bくんの中に、今育ちつつあること

①いろいろな遊びを経験してきた中で、遊ぶことの楽しさを知った。特に積木あそびは、安心して夢中になって遊ぶ姿が見られる。

②あそびの中で、友達の存在を意識しはじめた。

③積木コーナー、砂場など行動範囲が広まってきている。

#### ㊪Bくんに学んだこと

①周りから見てひとりであそんでいるようでも、本人はそこにいる友だちと一緒に遊んでいる意識がある。

②友達を意識するきっかけは様々で、仲よく遊ぶだけが友達と意識しているようではない。

③子どもには安心して遊ぶ場所がある。Bくんは、積木コーナーや砂場のすみでは、落ち着いて長い間遊んでいられる。いつでも、どこでも安心して遊ぶ場所があるように、常に遊ぶ道具などの位置を考えていきたい。

〈事例 3〉 年少 3 歳児 19名

—お友達と遊べるようになってほしい A 君と共に。—

担任：増田とし美

1. 学級経営のねがい

自然や友達、教師と関わり心をよせあいながら、ひとりひとりが「こうしてみたい」、「こうやりたい」という気持ちを出しあって、その中で気づかう心、思いやる心を育てていってほしい。

2. A 君を見つめて。

入園当動、活動をする時、「やだも〜ん、見てるもん」と座り込んでしまった A 君。時には、手のつけられないくらいはしゃぎまわっていた A 君。そんな A 君もお話、絵本には大変興味を示した。

「絵本を見たりする中で、素直な A 君の心の動きや、豊かな発想を大切にしていイメージを広げ、遊びにひたってほしい。

「友達と遊ぶ中で、自分を出し、友達とぶつかり合いながら、友達の気持ちもわかって一緒に遊べるようになってほしい」

という願いをもって、A 君をみつめてきた。

3. 砂あそびを通して

幼稚園にも慣れて、ブロック、砂あそびと遊びが発展する中、A 君は所在なげにあっちこっちと歩きまわっていた。そんな中、「僕もやりたいけどサ」と興味を示したのが砂あそびだった。雨だぞーと砂をかけて遊びはじめた。何日も砂遊びをしていると、自分から庭へ出て、遊びこみはじめた。ショベルカー、泥んこかいじゅう、セメント工場と、友達と共にお尻まで水につかり、泥だらけになりながら遊べるようになっていった。

砂をかけてしまい、友達と衝突したり、シャベルの取り合いをする中で、友達と遊ぶ楽しさがわかってきたようだ。砂遊びの中では A 君の素直な会話も聞くことができた。

4. 子ども達と劇あそび。

泥んこかいじゅうだと追いかけて遊びを楽しむことができた A 君の中には、絵本の中にひとりこみ、お話のイメージを広げていく素地があったように思われる。そこ

で、模倣遊びや簡単な劇遊びができるのではないかと考えた。

4月当初から、まねっこ遊び・大きくなあれ小さくなあれなど簡単な模倣遊びを取りあげてきた。A君は、体を動かすことにとまどっていたが、友達の様子を見ながら心の中では表現遊びをしているようだった。

絵本『たまごの赤ちゃん』から、模倣遊びをすると、大高乗り気で、自分の考えを素直に表現していた。

この頃、お弁当にブドウを持ってきた子から種まきの話になった。そこで畑に聖護院と二十日大根の種をまき、成長を見守った。ある日、小さな芽を見つけた子ども達は、喜んでかぶの話をした。その時、K子のステージで劇やろうよとの呼びかけに、「大きなかぶ」の劇をやった。「僕おじいさんがいいのサ」と一番はりきっていたのがA君。お話のすじを進めていくのはA君だった。自信を持ったA君は、この後、恐竜ごっこ、マスクマンごっこと次々に劇あそびをやっていた。劇遊びで、自分の考えを自由に発揮しているようだ。

5. A君の中に育ちつつあるもの。

- ①教師や友達と自由にたくさん話ができるようになった。
- ②友達と一緒にいる事が多くなり、「入れて」と言って仲間に入れるようになった。
- ③劇遊びなど、自分の考えだした遊びに、ひたひたこめるようになった。

(本学附属幼稚園)